



Title	重度身体障害者の乗馬療法における記述的記録を通じた評価の試み
Author(s)	近藤, 尚也 / 安井, 友康
Citation	北海道教育大学紀要. 教育科学編, 61(2): 121-129
Issue Date	2011-02
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2339">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2339</a>
Rights	

## 重度身体障害者の乗馬療法における記述的記録を通じた評価の試み

近藤 尚也・安井 友康

北海道教育大学札幌校障害者福祉研究室

### Assessment of Therapeutic Horseback Riding for People with Severe Physical Disabilities through the Descriptive Case Records

KONDO Naoya and YASUI Tomoyasu

Department of Social Welfare for Persons with Disabilities, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

#### 概 要

障害者を対象とした乗馬療法は、アメリカやイギリス、ドイツなどにおいて広く行われるようになってきている。一方わが国においては、その取り組みは緒に就いたばかりであり、評価の方法についても手探りの状態にあるといえる。乗馬療法では騎乗者の身体的、精神的側面を中心とした専門的な評価研究が行われているが、日常活動の視点から記録を活用し、評価につなげることは少ない。今回、福祉支援施設における活動記録から、乗馬療法における騎乗者の変化を明らかにすることを目的とした。記述的記録から分析項目を抽出し、その変化に対する評価を行ったところ、抽出された評価点からその変化を可視化することができた。さらに、支援者（職員）へその評価をフィードバックすることが支援内容の質の向上に対して有効に作用するのかどうか分析を行った結果、支援者もフィードバックの必要性を感じており、活動成果の理解につなげることが可能であることが示された。

#### I. はじめに

障害者を対象とした乗馬療法は、アメリカやイギリス、ドイツなどにおいて広く行われるようになってきている。わが国では、1984年頃から障害者の乗馬への関心が高まり、1986年に日本身体障害者連盟（日本障害者乗馬協会の前身）、1995年に日本乗馬療法協会、1998年にRDA Japanが設立された。これらの動きに前後して1991年に大滝わらしべ園、1997年に浦河わらしべ園でイギリスRDA方式の活動が開始されるとともに、1998年

には北海道浦河に日本乗馬療育インストラクター養成学校が設立された。さらに、1999年には全国組織である全日本障害者乗馬協議会（ANTRA）が設立されるなど（局、2002）、徐々にではあるが、その取り組みが広がりつつある。

アニマル・セラピーの一種である乗馬療法は、活動の主眼が、医学的、スポーツ的、レクリエーション的なものなど幅がある（局、2002）。その効果として、身体的障害の改善、精神的障害の改善、障害者の社会への能動的な働きかけの機会の増加、障害者を取り巻く家族、保護者の環境改善

などが挙げられ(局ら, 2000), 医学, スポーツ, 教育学などの分野にまたがった総合的支援の側面を持つものとして認識されている。

プログラムの実施に伴う利用者の評価については, 騎乗者の身体的・精神的変化の評価法, 乗馬プログラム, 運動解析や生理的变化等の研究が行われている(MacKinnon et al., 1995, McGibbon et al., 1998, 慶野ら, 2007)。しかし騎乗者の変化を明らかにする評価は医学的, 理学的視点において行われることが多く, 日常活動の視点からの評価は十分とは言えず, 世界的に見ても研究的視点での論文はわずかであることが指摘されている(局, 2002)。

ところで障害者福祉施設などの福祉支援の実践現場では, 日常的に様々な専門的支援が行われ, 日々膨大な記録が蓄積されている。福祉支援における活動の記録については, 「実践において, 評価のために欠くことのできない貴重な資料である」(硯川, 1996)とされ, また「評価と記録はともにすべての実践過程に関わっており, 両者の関係は切り離せない。つまり, 記録は実践過程でのさまざまな情報を単に保存するというだけではなく, 実践を振り返り, 実践内容やその効果に関して評価する役割も果たしている」(狭間, 2005)ことが指摘されている。しかし, 「記録されたものについては, その機能はほとんど認められず, 休止・冬眠状態のまま, その後に破棄されるという宿命にある。まれに問題が生じたときの証拠という出番が与えられるというのが現状である」(福山, 2010)など, 日々の記録が十分な検証を得ないまま放置されている場合が多い。

そこで今回, 障害者福祉施設における日常活動の記述的な記録を定量化するとともにその項目を用いた利用者の活動評価を行い, 日々の乗馬活動の実践では見えてこない利用者の変化について, 明らかにすることを目的とした。

さらに支援者の乗馬活動に対する意識を明らかにしたうえで, 乗馬療法における利用者評価が支援者へのフィードバックの素材となり, その活動意識に対してどのような影響を与えるのかについ

ても検証を行った。

## II. 方法

### 1. 対象

対象は, 日本において早くより乗馬療法を取り入れて活動を行っている身体障害者更生援護施設<sup>註1</sup>において, 乗馬活動を行っている男性のケース2名である。対象ケースは施設に入所し, 入所当時より乗馬活動を行っている。活動の頻度は月1回程度であるが, 年度によっては, 年に数回しか実施できていないなど, 不定期の実施となっている。

なお利用するデータについては, 個人を特定できないよう配慮するとともに, 対象者, 家族, 施設に了解をとり実施した。ケースの概要は, 表1に示すとおりである。

表1 評価対象ケースの概要

	Case A	Case B
性別	男	男
年齢	26	30
障害	脳性麻痺, 体幹機能障害起立位保持困難	低酸素脳症による高次脳機能障害, 四肢麻痺
入所年	H15	H16
乗馬歴	H15開始	H16開始

### 2. 乗馬活動の内容と記録

対象者の利用する施設では, レクリエーションや身体機能の改善, 社会参加といったさまざまな観点から乗馬活動を行ってきている。

活動は基本的に乗馬療法のインストラクター(以下インストラクター)1名, リーダー1名, サイドウォーカー(以下サイド)2名の計4名が関わり, 専門の養成学校を卒業したインストラクターが立てた計画をもとに活動を実施している。インストラクターは個々の利用者(活動中は騎乗者)の状況を確認し, 課題, 注意点等を踏まえた計画を立て, 活動時はそれをもとに騎乗者の状況を把握しながらリーダー, サイドに指示を送る。

リーダーはインストラクターの指示のもと馬を先導し、サイドは騎乗者に危険がないよう介助や課題遂行の支援を行う。活動開始前にリーダー、サイドは活動内容を確認、活動開始時に利用者を交えてインストラクターとともに再度活動内容を確認する。インストラクターは基本的に担当している騎乗者の活動を行うが、リーダー、サイドは必ずしも毎回同じ人が行うとは限らない。一般的にサイドはボランティアで行われることが多い。しかし、本施設では職員が活動へ参加する機会が多く、騎乗者への援助もより生活状況を理解した上で提供できる様な場面が多い。

こうして行われた活動について、インストラクター、リーダー、サイドは記録を残している。記録は短文による記述的記録で書かれることが多く、インストラクターは活動計画や騎乗者個別の観点に基づき評価を記録する。リーダーは馬の様子について記録を行い、サイドは利用者の様子や気付いた点を記録することとなる(図1)。毎回の計画に関して評価の記録を行うが、日々の活動全体を通して見なおすことは少ない。

### 3. 評価の方法

本稿ではインストラクターによる過去の記録について読み取り、分析・定量的評価を試みた。

評定化の際には、乗馬療法専門のインストラクター2名が評価を実施した。なお、インストラクターは36歳と31歳の男性で、両者とも乗馬療法を専門とした養成学校を卒業後、対象者の利用する施設にて5年間乗馬を担当している<sup>註2</sup>。評定化は保存されている過去5年分(平成17年から平成21年まで)の記録について行われた。記録は「乗馬～馬が遠くにいたが(〇〇)氏が強引に乗ってしまう」「乗馬～指示通り安全に実施できる」「姿勢～声かけをしないと背中が曲がってしまう」といった形で記述されていた。

#### ①項目の抽出

記述された記録には、評価の観点がいくつかの項目で、大まかに分けられて記載されていた。そこで、まずその項目について抽出し、分類を行った。

#### ②評価の点数化と可視化

次に抽出された評価の観点についてインストラクター2名が評価者として点数化を行った。記述の内容から、「修正が必要」などマイナスの評価の場合は、点数を減らすこととし、5段階評価における点数化を行った。なお、うまくできていた場合を5点、だいたいうまくできていた場合を4点、あまりうまくできなかった場合を3点、うまくできなかった場合を2点、全くできなかった場合を1点とした。さらに点数化した結果について、グラフによる可視化を試みた。

### 4. 妥当性の検証

点数の妥当性を確認するため、インストラクターの他、3名により、それぞれインストラクターとの評価の一致率を測定した。評価者A(支援経験3年半)、評価者B(数回の支援経験者)、評価者C(支援未経験者)の3名で点数化を実施し、評価者Aは全項目を、評価者Bは、25日分(66個)、評価者Cは、15日分(63個)の活動記録について、無作為抽出し点数化を行った。

日付	場所	外馬場	天候	晴れ
騎乗者				
インストラクター	リーダー	サイド	右	左
騎乗馬	馬装 持手付鞍(手綱なし)			
レッスン評価	インストラクター (乗馬) 左サドルの促しをスムーズに促す。 <下馬> 特に問題なし <乗馬(右)> 全体的に前傾姿勢が目立つ。持手付の位置をよにする事で少し改善見られる。サイドの肩と後ろに下がる姿勢を上げるとバランス悪くなる。 <その他> 横直し、乗馬時と時に指示通りスムーズに行っていた。			
	リーダー 非常に落ち着いて歩いていた。後半(最後の2回)だけ少しバタバタした。			
	サイド (右) 姿勢は前傾姿勢にあってはいたが、足の介助は皆介助を行っていた。その他、肩、腰にも足が当たることもなかった。また表情も笑顔で乗馬を楽しんでいた。 (左) 姿勢緩和の指示とあるがスムーズに足はかかるとはなかった。			
注意点	前傾姿勢のフォロー。			
使用した道具	コーン(2)、旗(2)、ホース(2)。			

図1 乗馬記録の例

### 5. 支援者へのフィードバック

さらに、可視化した記録の評価を支援者へフィードバックすることにより、支援者にどのような影響を与えることができるかを検証するため、対象ケースの支援を行っている職員2名に評価のフィードバックを行った。さらに、フィードバック前後に、自由面接による聞き取り調査を行った。フィードバック対象支援者2名の概要は表2の通りである。

表2 支援者へのフィードバック対象者

	Trainer A	Trainer B
性別	女性	男性
年齢	23	23
在職年数	入職2年目	入職2年目
経験年数	2年	2年
職種	生活支援員	生活支援員

まず、フィードバック前の状態を明らかにするため、初めに乗馬療法における経験、積極性などの意識面、その他自由に意見を述べてもらった。聞き取り後、可視化した評価のフィードバックを行い、再度意識について聞き取ることで、評価のフィードバックがどのような影響を与えるのかを検討した。また結果のグラフ提示の際には、「初め、恐怖心が強くうまく乗馬できなかったが、回数を重ねていくと恐怖心もなくなり、スムーズに乗馬できるようになった」など、いくつかの記録内容や騎乗者の変化を併せて示した。聞き取り時間は

約1時間である。

## Ⅲ. 結 果

### 1. 抽出された評価項目

活動に関する記録は、乗下馬の様子、上半身や下半身など姿勢、合図、左右の理解、その他といった、いくつかの項目に分けられ記述されていた。その項目から2ケースに共通する共通項目と、それぞれのケースの個別項目に分けることができた。表3のように共通項目として「乗馬の様子」「下馬の様子」「姿勢」、個別項目として「左右の理解」「合図の有無」等を抽出することができた。共通項目はほぼ毎回記述されていたが、個別項目に関しては必ずしも毎回記述されてはいなかった。

表3 評価項目

	Case A	Case B
共通項目	乗馬 下馬 姿勢	
個別項目	合図	左右の理解 恐怖心 手離し 合図 手綱

### 2. 評価結果

図2はCase Aの共通項目の各点数、全体の平均点、共通項目の平均点を示したものである。こ

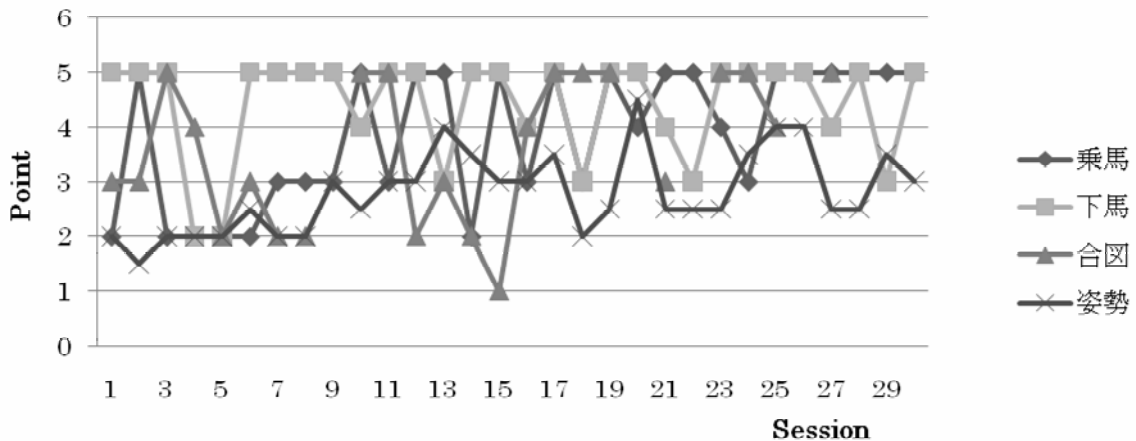


図2 CaseA 各回の得点

の図を見ると、一定の上昇傾向は見られず、回によって上下する状態が度々みられた。次に5回ごとの得点を平均にしたところ(図3)「下馬の様子」「姿勢」に関して、一度下がっているものの、全体としては上昇している様子が見られた。全体平均を見ると活動の回数を重ねるに従い、評価の点数が上がっている様子が示された。

Case Bについても、図4の通り、各回に関しては、点数のバラツキがみられた。しかし5回毎の平均点では「乗馬」「下馬」「姿勢」について、やや上下に変動している様子が見られたものの、全体としては上昇する傾向にあることが示された(図5)。

### 3. 妥当性の検証

評価の妥当性について検証するため点数の一致度を確認した。インストラクターと評価者Aの間では9割程度の一致を示したが、数回の支援経験者である評価者B、支援未経験者の評価者Cと、インストラクターとの間では6割程度であった。

表4 評価の一致度

	評価者A	評価者B	評価者C
評価数	170	63	66
インストラクターの評価と一致した数	152	36	35
一致度	89.4%	57.1%	53.0%

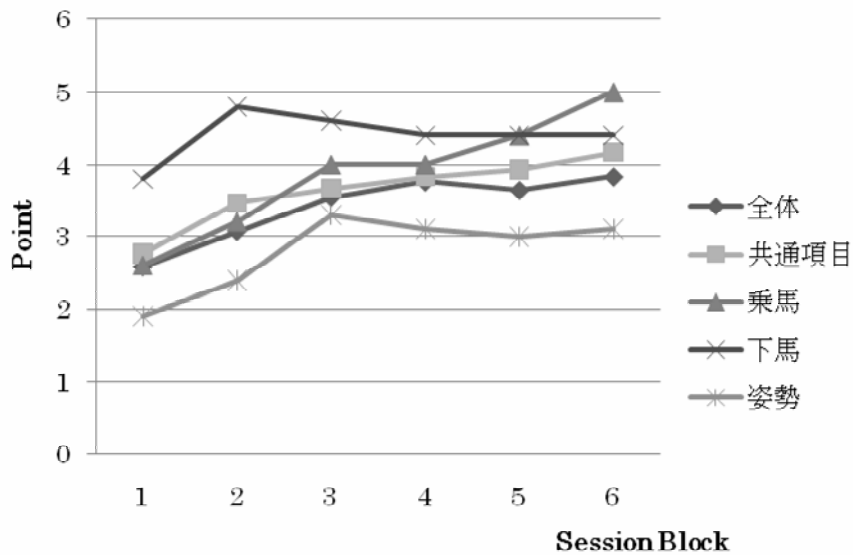


図3 CaseA 5回毎の平均点

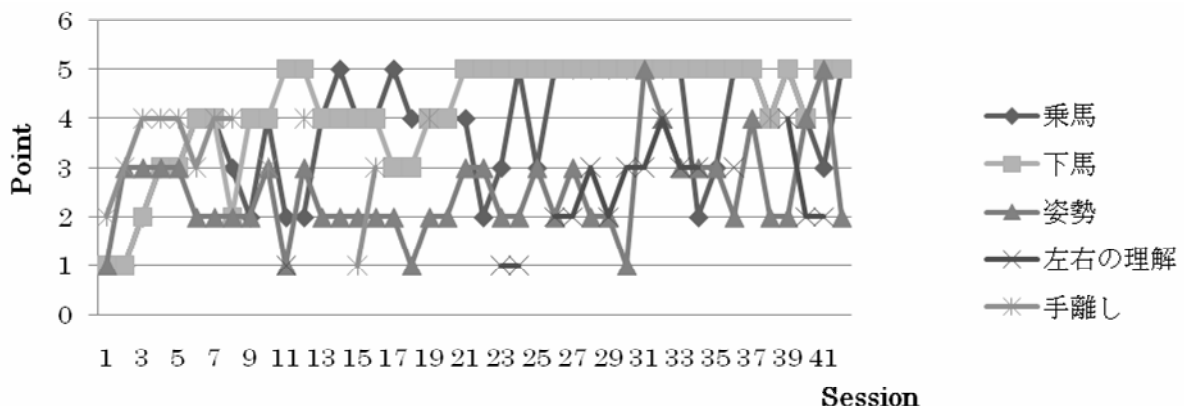


図4 CaseB 各回の得点

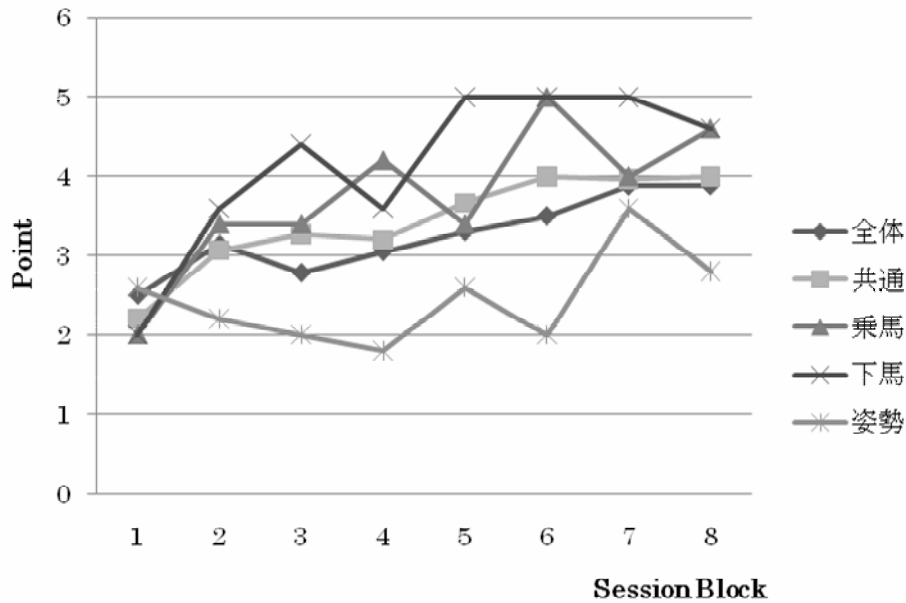


図5 CaseB 5回毎の平均点

#### 4. フィードバックの検証

支援者にフィードバック前の意識について確認したところ、表5のような回答を得ることができた。また、聞き取りの回答を踏まえ、インストラクターによる評価を視覚化したグラフから、支援者に評価のフィードバックを行い、積極性や成果・課題理解等への影響を確認した。

支援者へのフィードバック前の聞き取り結果から、活動の経験の中で、「やりがいや楽しさを感じている」一方で、「事故等の不安を抱えている」様子がうかがわれた。また、「大変なこともある」が、「失敗を繰り返さないよう意識を持って」いた。活動を通じて「利用者の変化を感じている」一面があるも、多くの場合はそれを感じることができていない。また、活動記録を振り返ることはしてなかった。しかし、一方で自身が主体となって実施している別の活動に関しては記録の振り返りや理解を深めようと情報の収集を行う場合もあった。職員として「活動の専門性を持つことは必要である」と考えており、さらに、積極的な活動参加のために必要なものとして「自身の目標設定」

や「評価が目に見える形でわかること」があげられた。しかし「どうしたら興味につながるのかを考える機会が少ない」、「どういった意識が必要かわからない」といった動機付けの面での課題となる回答も得られた。

さらにフィードバック後、支援者の意識に変化があったかを確認するため、再度聞き取りを行った。その結果、「目に見える形で騎乗者ができるようになったことが分かる」など、活動の成果や課題についての理解が得られた様子が示された。しかし、実際には、フィードバックした評価結果の理解のみにとどまり、たとえば「やる気に変化があったか」との質問に対して、「特に変化はない」などの回答が見られるように、結果を基にした積極的なケースへの働きかけに結び付くような、明確な回答を得ることはできなかった。

表5 聞き取り項目と回答（フィードバック前）

	Trainer A	Trainer B
活動内容	サイドウォーカー・管理作業	管理作業・サイドウォーカー・リーダー（1年程度）
活動での経験	自身も乗馬の経験をしたことがある 乗馬時馬がよってくるとかわいいが臆病な馬は心配	やりがいがあり、馬との関わりが楽しい 利用者によっては大変だったりするが、失敗したら次は失敗しないように心掛けている
利用者の変化への気づき	※活動時落馬した騎乗者を見たことがあり、しっかりしないと怖い	ある利用者は乗馬時の声だしができるようになってきていると感じたことがある 手綱操作がうまくできるようになった
記録の活用	※記録を振り返っていない	前回はできていたが、今回はできないなどその時その時で違っている ※いくつかの騎乗者に関しては変化に気づくが、一方で変化に気づかないことが多い
職員として専門性の必要性	ある程度あった方が良くと思う	※記録の振り返りをしていない ※他の活動（自身が主体となっている活動）では振り返り、次回に向けた計画やトラブルの解決を考える サイドが馬に関する知識・理解を増やしてほしい ※現在積極的に知識をつけるような場面はない ※どういった意識が必要かわからない
積極的に活動に参加するためには何か必要か	騎乗者ができないことができるようになったら興味につながるのではないかと 目に見える形でできるようになったとわかるとやる気につながる ※できるようになるのを見る部分は現在の活動状況では難しい・・・	課題→目標→達成→良かったと思う→モチベーションにつながる 活動時の自分自身の目標を設定する ※どうすれば興味につながるか、興味につながることにについて考える機会が少ない

※はネガティブな回答を示す

#### IV. 考 察

乗馬療法の効果は高いことが認められているが、それを実証するデータは少ない（川添, 2009）。わが国における乗馬療法の評価方法としてはHEIM scale（川喜田他, 2001）や、HEIP scale（慶野ら, 2001）などが開発されてきており、評価の観点、事前に定まっている場合は、こうしたスケールを活用することが有効である。しかし、福祉支援施設などの実践現場では十分な時間をとり、人数を費やして観察、記録することは難しい。そのため、日常的な記録を活用して評価につなげることが求められる。

日々の記述的な記録については、個別的な記述という特性から、実践者の主観性が強く入り（狭間, 2005）、評価の尺度が分散して変化をつかみにくい傾向がある。しかし、今回の研究で、記述的記録からケースの状況に合わせた評価の観点を抽出し、レッスンにおけるセッションを5回ごとにまとめて加算平均したところ、変化の過程を示すことができた。このことから、長期にわたる記述的な記録を、定量的な評価とするとともに各回の活動では、見えにくいケースの変化も、一定期間のまとめりとして評価することによって、乗馬療法におけるケースの変化をとらえることができたと考えられる。

またインストラクターと、ある程度経験を重ねた評価者（評価者A）との間では、評価の一致度が高く、今回の評価結果について、一定の信頼性があることが示された。一方、数回の支援経験者（評価者B）や、未経験者（評価者C）との一致度は、あまり高くはなかった。このことから、評価にあたっては、乗馬療法への理解度や騎乗者についての認識が、その点数化に影響を与えているものと考えられた。特に記述的記録に対して、点数をつける際には、活動に対するある程度の専門性が必要であることがうかがわれた。今後、評価の信頼性を高めるためには、評価者によって、「ことば」の受け取り方に差が生まれてしまう点を、いかにして減らしていくかが課題となろう。用語

を統一するなど、共通の認識が持てるような記録と、読み取りの工夫が求められる。

今回行った、支援者に対する評価結果のフィードバックに対し、「目に見える形で騎乗者ができるようになったことが分かる」などといった回答が見られたことは、このような日常の記述的記録を可視化することに対する、肯定的な捉え方とみることができる。ただし、利用者の変化を理解する程度にとどまっており、「気づき」をもとにした積極的な関わりを求めるまでには至っていなかった。評価結果を提示するだけでなく、評価結果を具体的な支援に生かすための情報提示の方法についても検討する必要がある。

本稿では、乗馬療法に関して、利用者の変化を明らかにするため、日常的な記録を活用した評価方法の検証を試みた。こうした記録を活用した方法は、日々の活動記録において蓄積された情報をただ埋もれさせておく(福山 2010)のではなく、福祉実践現場で行える評価の手法の1つの手掛かりとすることができるものと考えられる。

福祉実践現場における記録は、それぞれ個別の記録が重要なこともあり定型化されておらず、項目も比較的大まかに分けられていることが多い。そのため、身体面、精神面等幅広い視点から評価を行うことが可能である。

ただし、点数化に関しての課題も多い。客観性に欠ける部分や情報量が一定ではないことから、恒常的な評価につながりにくい、という課題があり、また点数化した際、その基準も曖昧になりやすい。

基準をどこまで明確にして点数化できるのか、また評価の妥当性をどこまで高めていくべきか、さらに福祉実践現場の記録の観点と研究的客観性の関係を、どこまで近づけていけばよいかなど、検討が必要である。

## 謝辞

大滝わらしべ園の職員・利用者の皆様をはじめ、本研究を行うにあたってご協力頂きました皆様に感謝申し上げます。

## 註

- 1) 対象者の利用する施設は、1988年6月に北海道大滝村(現伊達市大滝区)に重度身体障害者更生援護施設として開設された。施設の利用定員は40名で、脳性麻痺や脳血管障害など様々な障害のある人が生活している。また、1991年にイギリス RDA 方式の活動が開始されるなど、日本において早くから乗馬療法を取り入れた活動を行ってきている。第一筆者は、対象施設の運営を行う法人に支援者として勤務しており、また2008年まで当該施設にて支援員の職にあった。
- 2) インストラクターらは馬術部に在籍後、乗馬クラブのインストラクターを経るなどの乗馬に関する経験をしていた。

## 文 献

- 福山和女(2010): 社会福祉士養成講座編集委員会編集 新・会福祉士養成講座第7巻 相談援助の理論と方法 I 第2版, 中央法規, 263-287.
- 狭間香代子(2005): 社会福祉実践における記録の方法 - 質的方法と量的方法 -, 社会福祉研究, 92: 30-37.
- 川喜田健司, 桑野素子, 慶野裕美, 慶野宏臣(2001): 障害者乗馬の顔の表情を用いた評価法の基礎的検討, ヒトと動物の関係学会誌, 9・10: 140-144.
- 川添敏弘, 庄司泰夫, 高橋千秋, 高橋宏行, 村山啓, 井上博(2009): 障害者支援施設での乗馬療法(I) - 施設内での乗馬療法の試みと馬の飼育管理 -, 白鷗大学教育学部論集, 3(1): 151-172.
- 川添敏弘, 山川伊津子, 高橋千秋, 高橋宏行, 村山啓, 庄司泰夫, 井上博, 福山貴章(2010): 障害者支援施設での乗馬療法(II) - 施設内での乗馬療法の試みと職員による効果の検証 -, 白鷗大学教育学部論集, 4(1): 203-221.
- 慶野宏臣, 川喜田健司, 樹神俊春, 慶野裕美(2001): 障害者乗馬においてその効果を明らかにするための身体機能評価基準(HEIP scale)の試作, ヒトと動物の関係学会誌, 9・10: 134-139.
- 慶野宏臣, 松本美穂, 樹神俊春, 慶野裕美(2007): 乗馬することで著明な機能回復を引き起こした脳血後遺症片麻痺患者, 障害者スポーツ科学, 5(1): 63-71.
- MacKinnon, J.R., Noh, S., Lariviere, J., MacPhail A., Allen, D.E., Laliberte, D. (1995): A study of therapeutic effect of horseback riding for children with cerebral palsy, *Physical & Occupational Therapy in Pediatrics.*, 15:17-34.
- McGibbon, N.H., Andrade, C., Widener, G., Cintas H. L. (1998): Effect of an equine-movement therapy program on gait, energy expenditure, and motor function

in children with spastic cerebral palsy: a pilot study,  
Developmental Medicine & Child Neurology, 40 :  
754-762.

沖野達也(2007) : 介護記録の基礎技能スタッフの記録力を高める確かな手法, 中央法規

硯川眞旬(1996) : 新社会福祉方法原論-21世紀福祉メソッドの展開-, ミネルヴァ書房

局博一, 三田 勝己, 慶野 宏臣, 慶野 裕美(2000)  
: 障害者乗馬の世界, 理学療法学, 27(6) : 4-8.

局博一(2002) : 「身体障害者との共生社会」の実現に向けて-乗馬による共生社会の実現-, 日本学術会議編  
学術の動向

山本佳代子, 稲木光晴, 山根正夫(2005) : 我が国における乗馬療法(障害者乗馬)についての研究動向, 西南女学院大学紀要, 9 : 66-71.

(近藤 尚也 札幌校大学院生)

(安井 友康 札幌校教授)